

発表題目：
「ろう者らしさ」を巡るポリティクス

所属： 立命館大学先端総合学術研究科 一貫制博士課程 4 回生

氏名：種村 光太郎

1200 字程度で発表内容を記載してください。

戦前から現代にかけ、聴者たちは耳の聞こえない人たち、すなわち「ろう者」に対し、読唇などのコミュニケーションを強いてきた（金澤 2013）。これを抑圧であるとし、1995 年に当事者らは、ろう者ならではの文化や自然言語としての「日本手話」の存在を主張する「ろう文化宣言」を発表した（市田・木村 1995）。同宣言は、従来「聞こえる／聞こえない」という関係で捉えられていた聴者とろう者の関係を、「言語的多数派／言語的少数者」と新しく定義し、「ろう者アイデンティティ」の基礎を作った。

当事者運動や研究に対する「ろう文化宣言」の影響は大きく、日本手話で教育を受ける権利を求める運動（e.g. 小嶋 2008）や日本手話を用いるろう者（以下、「日本手話」話者）の実態を明らかにする研究へと展開した（金澤 2013）。だが同時に支配的な構造への対抗文化として「ろう者らしさ」を戦略的に本質化する動きは、それに馴染めないろう者たちの間で「分断」を生じさせた（e.g. 中川 2017）。

本報告が対象とする「近畿ろう学生懇談会（以下、近コン）」も「ろう文化宣言」の影響を受け、1997 年に「近畿聴覚障害学生懇談会」から現在の名称に変わった。その際に「ろう者らしさ」を戦略的に本質化し、①「日本手話」の使用を過度に強調したり、②「音」を否定し、「日本手話」話者以外のろう者を抑圧・排除する事態が生じた。奈倉（2023）は、既存の社会運動や障害研究の論理の問題点として、構造に対抗し「文化」を創造しうるのは一部の人間だけであることや、差異を「文化」と断定すれば多様な背景を持つ人びとの間に境界線を引くことになり、健常者と障害者の二項対立的な枠組みをかえって強化しうることを指摘し、支配文化と共存しながら、そのシステムとは異なる次元の「カルティベーション」から生み出される「共生の文化」の人類学的な探究を提起した。たしかに奈倉が述べる通り、近コンにおける「揉め事」「分断」の問題は、支配的構造への対抗を目指す社会運動の論理と密接に関係している。だが同時にそれに影響を受け築かれた「ろう者らしさの共同体」は、「聞こえない」という障害の受け入れや学校教育等での経験に根差した「記憶の分有」と密接に関わり実体化してもいる。岩谷（2018）はユダヤとジプシーを事例に、身体化され語られない記憶、限られた身内のみで共有される記憶、マイノリティの権利や承認を求めて物語化される記憶等を基にした「共同体の想起」を論じたが、ろう者も同様である。

そこで本報告では、近コンの運動に違和を持っていた者たちの語りを事例に、支配文化に対抗的な「ろう者らしさの共同体」が想起されるダイナミズムを、運動、障害、記憶の複雑な絡まり合いから照射するとともに、それとは異なる「共生のあり方」が個人の経験・記憶を通じて想起されてもいることを明らかにする。それを通じて運動論的な課題として論じられてきた「ろう者らしさをめぐるポリティクス」を再考したい。

◆【参考文献】①金澤貴之 2013『手話の社会学』生活書院。②木村晴美・市田泰弘 1995「ろう文化宣言—言語的少数者としてのろう者」『現代思想』23(3): 354-362。③小嶋勇監修・全国ろう児を持つ親の会 2006『ろう教育が変わる！』明石書店。④中川綾, 2017, 「学生懇談会時代の思い出から」日本手話研究所編『手話・言語・コミュニケーション』文理閣, 8: 31-46。⑤奈倉京子, 2023, 「＜特集＞「障害をめぐる共生の文化—障害の人類学を超えて」『文化人類学』87(4): 612-623。⑥岩谷彩子, 2018, 「序 共同体を記憶する —ユダヤ／「ジプシー」の文化構築と記憶の媒体」『Contact Zone』10:225-239。